様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　９ 月　９ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(A)（海外学術調査）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｈ０１６４１

研究課題名（和文）新コーパスに基づくカシュブ語文法の多階層的研究

研究課題名（英文）Multi-hierartchical Approaches to Kashubian Grammar on the Basis of a Newly Devised Corpus

研究代表者
野町　素己（Nomachi, Motoki）

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・教授

研究者番号：５０５１３２５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　30,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀末から20世紀にフリードリヒ・ロレンツによって行われたカシュブ語に関する包括的な方言調査を踏まえ、言語状況の変化が言語構造に与えうる変化、とりわけドイツ語的要素について、定点観測的な方言調査を行うことで明らかにすることを試みるものであった。コロナ禍に直面したため、当初通りの調査を行うことができなかったが、それでも、ロレンツに指摘されていた文法的なドイツ語要素が今日は減少していることが明らかになり、それは主としてポーランド語の影響が原因であることが示された。また、ポーランド語からの影響が著しく少ないカナダのカシュブ集落の調査を行い、そのデータからも同じ結論に達した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
最新の研究においてさえしばしばカシュブ語の現状の如く言及されるロレンツのデータを、1世紀を経て、社会言語学的状況の変化を詳細に検討したうえで、今日収集したデータと比較することで、カシュブ語の形態統語構造に起きた変化を明らかにすることができた。これはカシュブ語研究（言語記述、文法的分析）、さらにスラブ言語研究に資することは当然だが、言語接触研究や地域言語学の一般論に対しても資する成果でもある。とりわけカシュブ語が少数話者言語であり、特に消滅危機方言も複数あり、様々な形による成果発表は、現地コミュニティへの貢献となっている。

研究成果の概要（英文）：This study was based on the comprehensive dialectal survey of Kashubian conducted by Friedrich Lorentz in the late 19th and 20th centuries. The objective was to clarify the changes that changes in the linguistic situation can have on the linguistic structure, especially the Germanic elements, by conducting a fixed-point dialectal survey. Despite the unavoidable disruption caused by the global pandemic, the survey yielded insights into the decline of grammatical Germanisms observed by Lorentz. This decline can be attributed to the influence of standard Polish, a language that has become more prevalent in the region. This conclusion is supported by the analysis of the Canadian Kashubian dialects spoken in Ontario, whose ancestors migrated to Canada prior to the onset of the strong Polonization process.

研究分野：スラブ言語学

キーワード：カシュブ語　言語接触　スラブ諸語　ポーランド語　ドイツ語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

カシュブ語とはポーランドとカナダの一部で話されるスラブ語である。小規模ながら方言差が非常に大きいことで著名である。東欧革命(1989)迄はポーランド語の方言と扱われたが、今日は独立した言語と見做されることが多い。数世紀に渡るドイツ語との接触の結果、文法構造に非スラブ的要素が多いことが際立った特徴である。今日の話者数は約 10 万人とされるが、ポーランド化が急速に進み、実際の話者数は遥かに少なく、UNESCO は消滅危機言語に指定している。従来のカシュブ語研究は、ポーランド方言学の伝統に則り、音声学・音韻論、形態論および語彙研究が中心であった。例えば Stieber/Popowska-Taborska 等の主要研究「カシュブ及び隣接方言の言語地図」(1964-1978)においても形態統語論、とりわけ統語論に関しては、「カシュブ語研究の課題である」と Stieber が 1978 年の時点で述べているにもかかわらず、方言調査に基づく本質的な研究成果は約 40 年間現れていない。また言語接触の理論が発展しているが、概して理論に基づく分析も欠いている。形態統語論・言語接触論を含んだ重要な研究として Lorentz の「ポメラニア文法」(1927-1937)があるが、これらは 20 世紀初頭迄の現地調査による研究であり、第 2 次大戦以降に社会言語状況が完全に変化する前の記述である。現代語の観点では、ポーランド語との二言語併用の影響からカシュブ語統語論を分析した Makurat(2014)があるが、用例は豊富であるものの分析の理論枠組みはなく、一般論への貢献、スラブ語研究に通じるカシュブ語文法の特徴づけはない。ポーランド以外では Stone(2003)や Dulichenko(2008)の記述文法、Migdalski の動詞形態統語論(2006)があるが、これらは現地調査を行わずに先行研究の例の流用に終始し、独自性が弱く、また分析も不十分であった。Knoll(2013)の言語接触論から見たカシュブ形態統語論研究は優れているが、分析現象の選択が恣意的で、用例は主に上述 Lorentz の研究に依拠している点、また変化に関する説明がないという問題が残っていた。

２．研究の目的

本研究は、従来のカシュブ語研究で最も不十分であった主に言語接触に基づく形態統語構造の変遷に関するデータ収集およびその記述と多角的な分析を目的とした。その際、19 世紀から第 2 次大戦までの方言データと、従来未調査であった地点（カナダ）のデータを含めた、現地調査に基づく各方言の最新のデータを網羅的にまとめ、通時的・共時的に比較可能な独自データベースの構築と公開を目的とした。また、Lorentz のデータに偏らないよう、19 世紀、20 世紀に行われた小規模な方言調査によるデータ、現地古文書館に未刊行のまま保存されるデータの収集を行うことも目的とした。収集したデータは、1.一般論（言語類型論、言語接触論、地域言語学、歴史言語学）、2.スラブ諸語比較・対照研究、3.スラブ・ドイツ言語接触の他事例との比較の 3 つの視点から分析する。特に、従来未記述である文法範疇の文法化の度合とそのパターンを、社会言語状況、地域差、話者の年齢差を考慮に入れて総合的に記述・分析し、言語接触に基づくカシュブ語文法の変化傾向とその特殊性と普遍性を、多階層的に明らかにすることを目指したものである。当該領域の研究が概して少数であることに加え、殆どの研究で次の問題点が十分考慮されなかった。

1. 社会言語状況の変化を踏まえた新コーパスの必要性:第 2 次大戦前のカシュブ人はドイツ語との 2 言語併用でドイツ化が進んだが、戦後は完全にポーランド語との 2 言語併用に移行しポーランド化が進行した。しかし 1960 年代以降総合的な方言調査が行われず、カシュブ語の現状、言語状況の変化を踏まえた文法構造の通時的変化に関する実証的な研究が存在しない。
2. 重要調査地点の欠落:19 世紀にカナダに移住したカシュブ人の包括的な言語分析は存在しない。移住地では本土と異なりドイツ語やポーランド語の影響が無く古い特徴が部分的に保たれているため、この方言の分析はカシュブ語通時・共時研究に極めて重要である。
3. 不十分な研究枠組み:文法範疇が定義無く自明とされ、また分析理論の妥当性も顧みられなかった。その結果、各範疇の文法化の程度やそのパターンは不明のままである。また言語類型論、言語接触論、歴史言語学など一般論に貢献しうるカシュブ文法の位置づけもなかった。なお諸現象の地域差も未検証であった。
4. 比較・類型的視点の欠如:非スラブ要素こそがカシュブ文法の主要特徴だが、他のスラブ語やスラブ・ドイツ言語接触の事例との比較研究が行われていない(cf. Wölke/Bartels 2015)。ゆえに言語接触によるカシュブ語の言語変化が普遍的な現象なのか、それともカシュブ語が他の言語と比べて特殊なのかが不明のままであった。またカシュブ語が特殊ならば、その原因が何かということに対する説明努力がなかった。
5. 社会言語学的視点の欠如:Trudgill(2011)によれば、言語外状況は言語変化に影響を与え、その変化に一定の相関がありうる。しかし従来の研究は言語そのものの研究に終始し、言語外事実の影響、多言語使用状況、言語態度、言語政策の変化等の要素が分析されていない。また、世代間の言語使用差も顧みられていない。

以上の観点から、現状の記述と通時的変化を多角的に、理論的に検証することを目的とした。

３．研究の方法

カシュブ各地域の個別の変化を検討するために、20 世紀半ばに行われた Stieber/Popowska-

Taborska(1964-1978)の大規模方言調査の結果に基づいた6方言区分を対象地域の基礎に置き、2011年国勢調査でカシュブ語話者が多い地域である地点を調査地候補とした。なお、19世紀末のLorentzの方言区分（ただし西部方言は現在は概ね消滅）も参考にし、各調査地点では可能な限り多くの聞き取り調査を通じてデータ収集を計画した。それを19世紀半ばのHilferding、20世紀初頭Lorentzや19世紀末のBronischの方言データ（Teksty pomorskie 1924他）と定点調査的な比較するという手段を取る。また、現地文書館や博物館に保管されているLorentz以外の言語資料、とりわけ20世紀最大のカシュブ作家Aleksander Majkowskiの未刊カシュブ語文法および正書法の手稿も分析し、従来の20世紀初頭の言語資料の層を厚くしたうえで、それを現代の言語資料と比較し、その変化を記述・分析する。なお、研究期間中にコロナ禍で大規模な現地調査が不可能になったため、スカイプやzoomを用いたオンラインによる調査も部分的に行った。

また歴史的にドイツ語が接触してきたいくつかのスラブ語（上下ソルブ語、ブルゲンラント・クロアチア語、クロアチア語カイ方言）の現地調査および先行研究との比較・対照を行い、カシュブ語に見られるドイツ語からの影響に関わる特殊性と一般性、言語変化のパターンを明確化する。

４．研究成果

まず最大の問題として、コロナ禍が調査を直撃し、対面調査が不可能になっただけではなく、これまで協力実績があった優れた情報提供者の他界があったこと、また研究分担者の急逝なども続いたため、研究遂行に大変な痛手が生じた。また上述のように調査方法の変更も強いられたため、当初予定していた包括的な定点観測的な調査は行うことができなかったが、それでもLorentz の記述に見られたドイツ語からの影響とみられる複数の文法現象の多くが失われいることが明らかになった。具体的には、

１．指示代名詞に端を発する「定冠詞」および数詞「１」から発展した「不定冠詞」は現代語には存在していないこと、

２．Stone(2002)らが指摘していた「随格」と「具格」の合一に関する強い傾向は現代語では存在しないこと、

３．他動詞が否定されたときにおいても、目的語が対格と属格の双方が可能であるという記述は現代語では当てはまらないこと、

４．いわゆるnegative concordは現代語においては他のスラブ語と変わらぬ「一致パターン」以外存在しないことなど、

５．迂言的動詞構造（いわゆるhave動詞、be動詞を助動詞とした構文）のうち、have動詞を用いた構文は、ドイツ語のhaben動詞を用いた迂言的構造と異なり、主として過去ではなく完了を表すが、ポーランド語の影響から結果相を表す構文として意味に幅が見られること、また be動詞を用いた構文はドイツ語のsein動詞を用いた迂言的構造と異なり、過去ではなく、結果相を示すこと

以上が明らかにされた。その結果として、今日のカシュブ語は、Heine and Kuteva(2002)が論じるような「標準的平均的ヨーロッパ語」(SAE）に近い位置を占めていないことが明らかになった。これらは言語類型論および地域言語学への新たな貢献と言える。上記の言語変化はドイツ語のみで調査を行ったLorentzによる、ドイツ語に偏った言語記述によるだけではなく、カシュブにおける社会言語学的な変化、とりわけポーランド語からの影響であることが明らかにされた。以上は複数の研究論文で発表されたが、中でも Danylenko との共編著書の Slavic on the Language Map of Europe: Historical and Areal-Typological Dimensions(De Gruyter 2019)に含まれている論文Placing Kashubian on the language map of Europeにまとめられている。

なお、地域言語学の観点から、カシュブ語と環バルト海諸言語との言語連合についても研究に取り組んだ。この言語圏でカシュブ語はしばしばその構成言語とされるが、これまで分析量は少なく、あったとしても二次的データに基づくことが多く、さらにLorentzのデータに基づく検証結果であった。本研究では、歴史的および最新のデータを分析し、環バルト海言語連合に見られる典型的な言語構造の収束現象は見られないことをNomachi(2019)で初めて具体的に示した。

また、本研究で行った現地調査と現代語資料をもとにしたカシュブ語の分析は、英文による最も重要なハンドブックThe Slavonic Languages (Routledge 近刊)の新装版の一章Kashubianとして刊行される。なお、本書の初版では既存の外国語によるカシュブ語文法書類を英語に書き写した性格が強いため新たな記述文法として一定の価値を持つと考えられる。

なお、19 世紀にカナダ・オンタリオ州に移住したカシュブ人の言語は特にポーランド語の影響がカシュブ本土よりも弱かったわけだが、グダンスク大学のカシュブ語・文学を専門とする研究者との共同現地調査を行い、彼らの子孫の言語を分析することでその実態を明らかにした。英語からの影響を一定程度受けてはいるものの、19世紀半ばに記録されたHilferdingのカシュブ方言資料と比較し、とりわけポーランド語の影響を強く受ける以前の状態を保っていることが明らかにされ、Nomachi(2018)で発表された。

この他、本研究で得られたカシュブ語のデータを背景に、同じくドイツ語からの強い影響を受けたブルゲンラント・クロアチア語の前置詞省略構造に関し、共時、通時、地域の観点からその特徴を初めて明らかにしたことも特筆に値する（Nomachi 2022)。また、同じく本研究で得られた動詞 give を使った、カシュブ語に特徴的な存在文のデータを分析した研究発表を 2017 年、

2018 年に行った。現在はそのデータをもとに、より広い言語類型論と歴史言語学の観点からオハイオ州立大学の Brian Joseph 教授と共著論文を行い、2024 年度に刊行の予定である。

さらに、本研究で発見された Aleksandar Majkowski の未刊行のカシュブ語文法を、グダンスク大学の研究者と共著でコメント付きの文法書として刊行準備を進めている。分析は既に終わっており、その一部は Nomachi(2021)で刊行した。文法書全体の刊行は 2025 年度に予定している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計33件（うち査読付論文　27件／うち国際共著　7件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 Motoki Nomachi	４．巻 -
２．論文標題 Neopublikovannyj Ocerk makedonskogo literaturnogo jazyka Samuila B. Bernstejna	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Grammatika v obscestve, obscestvo v grammatike: issledovanija po normativnoj grammatike slavjanskix jazykov	６．最初と最後の頁 271-303
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Motoki Nomachi	４．巻 2
２．論文標題 How do Russians verbalize the art of kissing? An appendix to Jurij D. Apresjan's analysis of the verb celovat' 'to kiss'	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Proceedings of the V.V. Vinogradov Russian Language Institute	６．最初と最後の頁 241-256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Motoki Nomachi	４．巻 50
２．論文標題 Linguistic Ideology and the Art of Re-Edition: On the Second Edition of Ioann Rajic's History of Various Slavic Peoples (1823)	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Nas jezik	６．最初と最後の頁 715-725
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Aleksandra Salamurovic, Motoki Nomachi	４．巻 -
２．論文標題 Glagolitic script in media: between ritualization and innovation	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Von der Wiederholung zum Ritual Rezente Prozesse in den Sprachen und Kulturen suedosteuropaeischer Gesellschaften	６．最初と最後の頁 229-250
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Keiko Mitani	4．巻 20
2．論文標題 Slavonic Tradition of the Apocryphal Acts of Thomas in India and the MS 1789/700 of the Dragomirna Monastery (Moldavia, Romania)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Scripta & e-Scripta	6．最初と最後の頁 199-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三谷惠子	4．巻 35
2．論文標題 『ヨブの遺訓』スラヴ語版　言語の変異性とテクスト属性の関係	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Slavistika	6．最初と最後の頁 471-486
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三谷惠子	4．巻 10
2．論文標題 スカンデルベグ物語　伝説とヴァリエーション	5．発行年 2020年
3．雑誌名 れにくさ	6．最初と最後の頁 457-469
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Motoki Nomachi	4．巻 19
2．論文標題 The postposed definite markers in the Gorani dialects of Kosovo: The evidence from Ramadan Redzeplari ’s literary works	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Slavisticki studii	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Aleksandra Salamurovic, Motoki Nomachi	4．巻 -
2．論文標題 Glagolitic script in media: between ritualization and innovation	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Studien zu Suedosteuropa	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Tomasz Wicherkiewicz, Motoki Nomachi	4．巻 -
2．論文標題 Slavic languages as minority languages	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Brill’s Encyclopedia of Slavic languages and linguistics	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Motoki Nomachi	4．巻 なし
2．論文標題 Is the Kashubian numeral jeden ‘one’ an indefinite article?	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Sbornik s dokladi ot trinadesetite mezhdunarodni slavisticni chetenija: Jubilejna nauchna sesija v chest na prof. Ruselina Nicolova（第30回国際スラヴ学会：ルセリナ・ニツォロワ教授記念講演会	6．最初と最後の頁 140-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Motoki Nomachi	4．巻 2
2．論文標題 Dynamika sytuacji kaszubszczyzny w ujeciu teorii emancypacji jezykowej（言語解放論からみたカシュブ語言語状況の動態）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Polonistyka na poczatku XXI wieku. Diagnozy Koncepcje Perspektywy（21世紀初頭のポーランド学。予想、コンセプト、展望）	6．最初と最後の頁 71-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Motoki Nomachi	4．巻 なし
2．論文標題 Kashubian in the Circum-Baltic Area	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Praca zbiorowa poswiecona 90-leciu Prof. Janusza Siatkowskiego（ヤヌシュ・シャトコフスキ教授生誕90年記念論集）	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Motoki Nomachi	4．巻 なし
2．論文標題 Placing Kashubian on the language map of Europe	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Slavic on the Language Map of Europe: Historical and Areal-Typological Dimensions	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Keiko Mitani	4．巻 14
2．論文標題 The Dream of King Jehoash: A Textual Analysis	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Scrinium	6．最初と最後の頁 298-317
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三谷惠子	4．巻 21
2．論文標題 環バルト海地域の言語接触と言語変化	5．発行年 2018年
3．雑誌名 スラヴ学論集	6．最初と最後の頁 55-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kejko Mitani	4．巻 16
2．論文標題 Tekstologicheskij i lingvisticheskij analiz spiskov "Dejanij apostolov Petra i Andreja v strane varvarov（「使司ペトルとアンドレイの蛮邦における行い」のテクスト学および言語学的研究）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Trudy Instituta Russkogo jazyka im. V.V. Vinogradova. Lingvisticheskoe istochnikovedenie i istorii russkogo jazyka （V. V. ビノグラードフ名称ロシア語研究所紀要。言語学的資料研究およびロシア語の歴史）	6．最初と最後の頁 158-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 (with Bojan Belic) Motoki Nomachi	4．巻 -
2．論文標題 Banat Bulgarian and Bunyev: a Language Emancipation Perspective	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Linguistic Regionalism in Eastern Europe and Beyond: Minority, Regional and Microliterary Languages	6．最初と最後の頁 67-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 (with Bojan Belic) Motoki Nomachi	4．巻 10
2．論文標題 21st Century Standard Language Ideology in Serbia and Poland	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Belgrade English Language and Literature Studies: A Special Issue Dedicated to Ranko Bugarski on the Occasion of His 85th Birthday	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 (with Bojan Belic) Motoki Nomachi	4．巻 17/3
2．論文標題 Vojvodina’s Minority Languages in Light of a Language Emancipation Theory	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Balkanistic Forum	6．最初と最後の頁 19-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Motoki Nomachi	4．巻 74
2．論文標題 Contact-Induced Grammatical (Non)Changes? Observations on Morphosyntctic Structures in the Kashubian Dialect in Canada,	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Juznoslovenski filolog	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Motoki Nomachi	4．巻 -
2．論文標題 Another Look at the Rise and Fall of the West Polessian Literary Microlanguage (with a Glance Toward Less Discussed Ukrainian Factors)	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Ukrainian Studies and the Slavic World	6．最初と最後の頁 264-283
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Keiko Mitani	4．巻 -
2．論文標題 Slavic Versions of the Skanderbeg Story: Textual Relationship and Narrator Attitude	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Balkanskij tezaurus: vzgljad na Balkany izvne i iznutiri（バルカンのシソーラス：バルカンへの内部および外部からの眼差し）	6．最初と最後の頁 52-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Keiko Mitani	4．巻 67
2．論文標題 The Croatian Tradition of the Story of Akir the Wise in South Slavonic Recensions	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Slovo	6．最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Keiko Mitani	4．巻 43/2
2．論文標題 Uz-prefixation and dependnet future in Croatian	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Rasprave（論考）	6．最初と最後の頁 379-397
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三谷惠子	4．巻 6/2
2．論文標題 近代国家の法における民衆言語－V.ボギシッチの言語観－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 青山ローフォーラム	6．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三谷惠子	4．巻 32
2．論文標題 コンスタンティノス一代記』13章“ソロモン王の盃の銘”―R．ヤコ　ブソンのスラヴ文献学への貢献,再訪	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Slavistika	6．最初と最後の頁 73-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Johan van der Auwera, Motoki Nomachi, Olga Krasnoukhova	4．巻 na
2．論文標題 Connective negation and negative concord in Balto-Slavic	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Studies in Baltic and Other Languages. A Festschrift for Axel Holvoet on the occasion of his 65th birthday	6．最初と最後の頁 45-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Motoki Nomachi	4．巻 35
2．論文標題 The evolution of Samuil B. Bernstejn’s views on two “Questions of Slavistics	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Balkanistica	6．最初と最後の頁 111-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Motoki Nomachi	4．巻 XLIV
2．論文標題 Aleksander Majkowski as a grammarian	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Prilozi MANU	6．最初と最後の頁 177-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Motoki Nomachi	4．巻 na
2．論文標題 Interactions between Blaze Koneski and Samuil B. Bernstejn. From unpublished archival materials	5．発行年 2022年
3．雑誌名 XLVIII megjunarodna naucna konferencija na LIV letna skola na Megjunarodniot seminar za makedonski jazik, literatura i kultura	6．最初と最後の頁 43-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Motoki Nomachi	4．巻 25
2．論文標題 Afanasij Matveevic Seliscev’s unpublished manuscript on the South Slavic languages,	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Slavistika	6．最初と最後の頁 115-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Motoki Nomachi	4．巻 LXXVIII
2．論文標題 On a particular usage of the locative and accusative cases in Burgenland Croatian	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Juznoslovenski filolog	6．最初と最後の頁 383-408
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計31件（うち招待講演　12件／うち国際学会　24件）

1．発表者名 Motoki Nomachi
2．発表標題 Archaism or Innovation? One Particular Usage of the Locative and Accusative Cases in Burgenland Croatian
3．学会等名 Jezyk w regionie Region w jezyku. Konferencja IV（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 Motoki Nomachi
2．発表標題 Evolution of Samuil B. Bernstejn’s Views of Two “Slavistic Questions”
3．学会等名 LIX skup slavista Srbije（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Motoki Nomachi, Yaroslav Gorbachov
2．発表標題 Existential clauses in Kashubian: A historical and typological analysis
3．学会等名 Slavic linguistics society（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Motoki Nomachi, Yaroslav Gorbachov
２．発表標題 Existential clauses in Kashubian: A historical and typological analysis
３．学会等名 Posiedzenie Komisji budowy gramatycznej jezykow slowianskich（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Motoki Nomachi
２．発表標題 How do Russians verbalize the art of kissing? An appendix to Jurij D. Apresjan's analysis of the verb celovat' 'to kiss'
３．学会等名 Konferencija v cest' 90-letija Jurija Derenikovica Apresjana（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Motoki Nomachi
２．発表標題 Evolution of the Kashubian Indefinite Marker (Compared to Other High-Contact Slavic Languages)
３．学会等名 BASEES 2018 Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Motoki Nomachi
２．発表標題 Czy kaszubszczyzna zostala emancypowana?（カシュブ語は解放されたか？）
３．学会等名 Debata pt. Jezyki narodowe Europy Srodkowej i Poludniowej: Globalizacja, Ideologia, Tozsamosc（公開討論：中南東欧の国民言語：グローバル化、イデオロギー、アイデンティティ）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Motoki Nomachi
２．発表標題 The Characteristics of an Indefinite Marker in Burgenland Croatian from a Typological Perspective
３．学会等名 XVI International Congress of Slavists（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Motoki Nomachi and Yaroslav Gorbachov
２．発表標題 Evolution of Existential Clauses in Polish: Historical and Typological Accounts
３．学会等名 13th Slavic Linguistics Society Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Motoki Nomachi
２．発表標題 O novoj zalogovoj konstruktsii v kashubskom jazyke（カシュブ語における新しい受動構造について）
３．学会等名 Okruglyj stol po dialektologii XXII（第22回方言研究ラウンドテーブル）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Motoki Nomachi
２．発表標題 Grammatical Change in Kashubian as a Reflection of Sociolinguistic Change
３．学会等名 SRC 2018 Winter International Symposium. Languages Rising above Empires, Blocs, and Unions 1918-2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Motoki Nomachi
２．発表標題 Language Emancipation of Slavic Literary Microlanguages
３．学会等名 Seminar at School of International Letters and Cultures at Arizona State University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Motoki Nomachi
２．発表標題 Dlaczego mnie interesuja male jezyki slowianskie, zwlaszcza kaszubski?（なぜ小さなスラブ諸語、とくにカシュブ語が関心を引くのか）
３．学会等名 Zespol Ksztalcenia i Wychowania w Kamienicy Szlacheckiej（在カミェニツァ・シュラヘツカ教育会議）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 野町素己
２．発表標題 分裂と統合のジレンマ：カシュブ文学の事例より
３．学会等名 シンポジウム「東欧文学の多言語的トポス：複数言語使用地域の創作を巡る求心力と遠心力」
４．発表年 2018年

１．発表者名 野町素己
２．発表標題 「ポーランドなくしてカシュブなし、カシュブなきポーランドなし」再考：今日のカシュブ人の言語とアイデンティティを巡って
３．学会等名 フォーラム・ポーランド「ポーランド独立回復100周年記念国際学会2018（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Motoki Nomachi
２．発表標題 Ob odnom obshchem sintaksicheskom izmenenii v zapadnoslavjanskikh jazykakh（西スラブ諸語に共通して起きた統語構造の変化について）
３．学会等名 Linguistic Semiar at the Institute for Slavic Studies at Russian Academy of Sciences（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Keiko Mitani
２．発表標題 Importance of Intertextuality in Medieval Slavonic Literature: Apocalypse of Pseudo-Methodius in the Legend of Twelve Fridays as a Case
３．学会等名 International Conference of Society of Biblical Literature /European Association of Biblical Studies（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Keiko Mitani
２．発表標題 Dvanaest snova Shahinshahi. Rani ruski prijepisi u poredbi sa juzhnoslavenskom tradicijom（シャヒンシャヒの12の夢―南スラブの伝統と比較した古ロシアの写本）
３．学会等名 XVI International congress of Slavist
４．発表年 2018年

１．発表者名 Keiko Mitani
２．発表標題 Legal Language Questions in the History of Serbian, Croatian, and Montenegrin: The Nineteenth-century Situation Viewed from the Perspective of Forensic Linguistics
３．学会等名 SRC 2018 Winter International Symposium. Languages Rising above Empires, Blocs, and Unions 1918-2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Keiko Mitani
２．発表標題 Slavic Versions of the Skanderbeg Story: Textual Relationship and Narrator Attitude
３．学会等名 Balkanskij tezaurus: vzgljad na Balkany izvne i iznutiri（バルカンのシソーラス：バルカンへの内部および外部からの眼差し）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Keiko Mitani
２．発表標題 Croatian Glagolitic Texts of “The Story about the Twelve Fridays”: Textual Features and Relationship with other Slavonic Copies
３．学会等名 Medjunarodni znanstveni skup Fenomen Glagoljice（国際学術会議：グラゴール文字という現象）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 三谷惠子
２．発表標題 環バルト海地域の言語接触と言語変化
３．学会等名 日本スラヴ学研究会シンポジウム「バルト諸語とその隣人たち」（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Keiko Mitani
２．発表標題 Evolutive Change and Adaptive Change in Croatian What Andersen’s “abductive and deductive” model tells us about Language Change.
３．学会等名 The 23rd International Conference on Historical Linguistics（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Keiko Mitani
２．発表標題 Inscription on Solomon’s Chalice in Chapter XIII of Vita Constantini: An Old Question Revisited
３．学会等名 SBL/EABS 2017 International Meeting（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Keiko Mitani
２．発表標題 Lingvisticeskij i tekstologiceskij analis slavjanskih spiskov povestvovanija Dejanija apostolov Petra i Andreja v strane varvarov（スラブ語文書「使徒ペタルとアンドレイの蛮人の地における行い」に関する言語学およびテクスト学的）
３．学会等名 日本ロシア文学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 三谷惠子
２．発表標題 V.ボギシッチの事績に見るバルカン研究の可能性
３．学会等名 バルカン地域研究の新展開－民族文化の越境・接触・変化をめぐる多角的研究をめざして（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Motoki Nomachi
２．発表標題 Evolution of the Existential Clauses in Kashubian
３．学会等名 The 23rd International Conference on Historical Linguistics（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Motoki Nomachi
２．発表標題 Placing Kashubian in the Circum-Baltic (CB) Area and Beyond
３．学会等名 The 49th Annual ASEEES Convention（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Motoki Nomachi
２．発表標題 Can the Gorani language be planned? The latest sociolinguistic developments in the Gorani community of the former Yugoslavia
３．学会等名 Slavic Grad Colloquium（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Motoki Nomachi
２．発表標題 Early Nikita I. Tolstoj as a Macedonist
３．学会等名 11th Macedonian-North American Conference on Macedonian Studies（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Motoki Nomachi
２．発表標題 Zdzislaw Stieber and His Contribution to Kashubian Studies,
３．学会等名 Spuscizna Zdzislawa Stiebera wobec dawnych i nowych tendencji w jezykoznawstwie slawistycznym Sesja w 120. rocznice urodzin Zdzislawa Stiebera（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計6件

1．著者名 Motoki Nomachi, Shiori Kiyosawa	4．発行年 2021年
2．出版社 JaSK	5．総ページ数 303
3．書名 Grammatika v obscestve, obscestvo v grammatike: issledovanija po normativnoj grammatike slavjanskix jazykov	

1．著者名 Andrii Danylenko and Motoki Nomachi	4．発行年 2019年
2．出版社 Mouton de Gruyter	5．総ページ数 498
3．書名 Slavic on the Language Map of Europe: Historical and Areal-Typological Dimensions	

1．著者名 Aleksandr Dulichenko and Motoki Nomachi	4．発行年 2018年
2．出版社 Slavic-Eurasian Research Cener	5．総ページ数 452
3．書名 Slavjanskaja mikrofilologija（スラブミクロ言語研究）	

1．著者名 Dieter Stern, Motoki Nomachi, Bojan Belic	4．発行年 2018年
2．出版社 Peter Lang	5．総ページ数 347
3．書名 Linguistic Regionalism in Eastern Europe and Beyond: Minority, Regional and Microliterary Languages	

1．著者名 Tomasz Kamusella, Motoki Nomachi, Catherine Gibson	4．発行年 2017年
2．出版社 Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University	5．総ページ数 103
3．書名 Central Europe Through the Lens of Language and Politics: On the Sample Maps from the Atlas of Language Politics in Modern Central Europe	

1．著者名 Motoki Nomachi, Tomasz Kamusella	4．発行年 2023年
2．出版社 Routledge	5．総ページ数 268
3．書名 Languages and Nationalism Instead of Empires	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	三谷　惠子 (Mitani Keiko) (10229726)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	2022年に研究分担者から削除
研究分担者	橋本　聡 (Hashimoto Satoshi) (40198677)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・特任教授 (10101)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 SRC 2018 Winter Symposium. Languages Rising above Empires, Blocs, and Unions 1918-2018	開催年 2018年～2018年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関